

浄教寺十六羅漢像の修理が完成しました

(前編)

浄教寺（長田地区）が所蔵する十六羅漢像（県指定文化財）は、釈迦が亡くなった後に、その教えを守る従者として信仰された羅漢の姿を描いたものです。南北朝時代から室町時代（約600年前）に制作されました。同時代の作品では、16幅すべてがそろっていることは非常に少ないことから、貴重な文化財と評価されています。

浄教寺十六羅漢像は、元禄6年（1693年）に実施された修理から300年以上が経過し、画面は折れが生じ、糊の接着力も失われて絵の具の剥落が進行するなど劣化が進んでいました。浄教寺関係者のご尽力によって修理事業が計画され、朝日新聞文化財団の助成と和歌山県、有田川町からの補助を受け、平成30年（2018年）

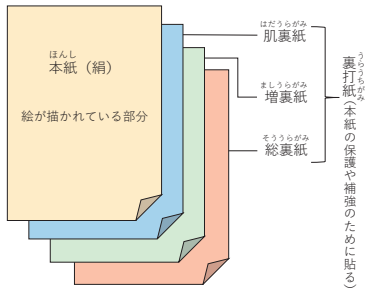


から3年に及ぶ修理が開始され、このたび16幅全ての修理が完成しました。本号と次号で、修理の工程や内容について紹介します。

掛軸は長年の保存に耐えることができるように、「本紙」の裏側に「裏打紙」と呼ばれる和紙を何枚も貼り合わせた構造となっており、浄教寺十六羅漢像の場合は3層の和紙が重なっています。修理は損傷状況を把握した後、水で膠を溶いた液を塗って絵の具の剥落を防止します。表具を新たに仕立て直すために掛軸を解体し、総裏紙・増裏紙の順番で除去していきます。鉄分などを取り除いたろ過水を吹き付けて除去して画面の汚れを除去した後、再度剥落止めなどを行って本紙を養生します。

裏打紙のうち、本紙のすぐ裏側にある「肌裏紙」は、前回の修理で墨色の紙が使われていることが判明し、その影響で画面全体が暗くなっていました。肌裏紙の除去は難しい修理工程の一つであり、最小限の水で湿らせて、作品を傷めないようにピンセットで紙の繊維をほぐしながら少しずつ慎重に取り除いていきます。

(次号へ続く)



浄教寺十六羅漢像の構造



肌裏紙の除去